クリスタ・クリューガー著

マックス・ウェーバーと妻マリアンネ

結婚生活の光と影

マックス・ヴェーバーのような、たぐい稀れな人物を画く場合、大づかみにいって二つの接近の仕方がある。一つはその学問的業績の側から、いま一つはその私生活の側から、である。本書は全体として後者の側からヴェーバーを見ているといえよう。ただ、本書の特徴は、それも彼の妻マリアンネの側からみていることである。そこで問題となるのは、当然のことながら男と女の関係である。

ヴェーバーをめぐる四人の女、母のヘレーネ、妻のマリアンネ、そして愛人のエルゼとトープラーが、妻マリアンネとの関わりを軸に描写されている。姑のヘレーネには息子の嫁として仕えつつも、他面では夫に役立つ妻として生きようとした。二人の間にネックがあるとすれば、子供がないことであり、その意味では家族を形成することができなかった点であろう。何故なのかを探索することは徒労だろう。だが、エルゼやトープラーとの場合にも同様であったことは事実である。ヤッフェ夫人であったエルゼには四人の子があるというのに。

本書ではマリアンネは厳格な倫理的個人主義者、やや保守的な色彩を帯びた女権拡張論者として描かれている。そして、夫ヴェーバーに少しでも役立つ女性でありたいと願い、「明らかに性的欲望をもって夫に向かわないことを自分の義務と感じている」(訳書一六〇頁)女性とみなされている。しかし、著者のクリスタ・クリューガーの視点は、マリアンネが終始そのように努めようとしながらも、女性としてその心が揺れ動いていたことを見逃さない。

その一つのエピソードが一九〇九年十月ヴィーンでの社会政策学会に出席した後でヤッフェ夫妻と数日をアドリア海のグリニャノで過ごしたときのことである。「この旅行で、マックスがエルゼを愛しているという考えが初めてマリアンネの心に浮んだ」(訳書一六一頁)。「彼女は、マックスが散歩の際に、片手いっぱいに花を摘んで、マリアンネには色とりどりの花束を――そしてエルゼには慎重に、優しく彼女の服に合う色合いが組み合わされた花束を作ったことを描いている。エルゼのための花を選ぶ際にのみ彼は彼女の個性を際立たせたのだ。……憂いがちにマリアンネは自問する。『いったい彼はかつていつか一度でも、このような態度で私に花を渡してくれたことがあっただろうか? たしかに彼は一度として私の心を捕えようと一心になったことはなかったにちがいない』。……いずれにせよマリアンネは、マックスがエルゼの魅力によって生き返って見える新しい証拠を発見したのである」(訳書一六二頁)。このエピソードは著者が女性であったことにもよるだろう。男性ならば、おそらく看過してしまうにちがいない。こうして、マリアンネは「自分ではマックス・ヴェーバーの関わりは、彼の妻のそれとは種類を異にしている。つまり彼の場合、エロス的欲求はマリアンネよりも際立っている」(訳書一七三頁)。だが、ヴェーバーとエルゼの関係は、エルゼの自由恋愛指向の感情がヴェーバーの弟アルフレートに向けられたことによって複雑化する。アルフレートはエルゼに書く。「エドガー以外に、あなたから私を引き離そうとする二番目の人間が……私自身の兄だなんて。私は目下そのことでいつも胸をかきむしられる思いをしています」と(訳書一八〇頁)。この三角関係の構図は、結局こわれないままで終った。一九〇七年にエミール・ラスクが若い女流ピアニスト、ミーナ・トープラーをヴェーバー邸に連れてくることによって、新たな展開を迎える。マリアンネはヘレーネに書く。「マックスはまた、彼を生気づけてくれる女性を一人見つけました」と(訳書二〇三頁)。ヴェーバーは明らかに彼女の音楽的資質と教養から刺戟を受けて『音楽社会学』を書き上げた。のちに、老婦人となっていた彼女は、「あなたはなぜ一度も結婚しなかったのですか」と問われると、彼女は「マックス・ヴェーバーが私を愛していたから」と答えたという(訳書二一九頁)。

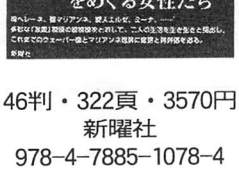
ヴェーバーはミュンヘンで死んだが、傍で世話していたエルゼは、私がエルゼに一九七〇年ハイデルベルクで逢ったとき、よく散歩しながらヴェーバーは美しく力強いバリトンで歌ったと語った。私が彼女に会ったとき九六歳だったが、身なりを正し、薄く化粧をしていたのが忘れられない。終りに、徳永恂氏の「あとがきに代えて」は、一読に値いすることを附言しておく。(徳永恂・加藤精司・八木橋貢訳)(すみや・かずひこ氏=立教大学名誉教授・経済・社会思想史専攻)

★クリスタ・クリューガー(1938~)は翻訳家。ベルリン大学で文芸学や美学を修める。

ヴェーバーをめぐる四人の女たち

妻の側からヴェーバーの人物像を画く

住谷一彦



46判・322頁・3570円
新曜社
978-4-7885-1078-4